

いなかのりんじん  
あぐろげいとーん

編集：九州教区教会協力委員会

※あぐろげいとーん：ギリシア語で「田舎の隣人」の意味。都会の隣人と違い、互いに支え助け合う仲間となることを願って。

## 九州教区における

## 広島カープ優勝の意義について

教会協力委員長 深澤 奨

プロ野球のセ・リーグでは広島カープが1991年以来25年ぶりにリーグ優勝を果たしました。所属選手の年俸総額が2倍以上にもなる2位ジャイアンツに17.5ゲームの大差をつけての圧倒的な優勝でした。広島出身のわたしとしては、嬉しいことこの上ありません。しかしこの優勝は、わたしだけの喜びにとどまらず、この九州教区にとっても大変意義深いものでありました。

広島を長らく優勝から遠ざけたのは、大都市を本拠地とし潤沢な資金力を持つ人気球団に有利な制度が導入されたことが要因の一つでした。一定期間在籍した選手を他球団がより高額な年俸で自由に引き抜くことができるFA制度によって、広島の有力量選手は資金力の豊かな球団へ次々と買われていきました。買われるばかりで、1993年の制度開始以降カープは12球団で唯一、FA制度によって1人も選手を獲得していません。また逆指名制度（「希望入団枠制度」に名称変更後2007年に廃止）も、地方の貧乏球団を好んで指名する新人が少ないことから、戦力格差を広げる結果となりました。

そんな中、カネに頼れないカープは、無名の若手を発掘しては伝統の猛練習で鍛え、ファンの熱い応援で育て上げ、地元愛豊かな名選手たちを次々と生み出してきました。4番やエースが他球団に引き抜かれても、いつかきっと帰って来てくれると信じて、涙を飲んで快く送り出し、祈って待ち続け

ました。大リーグに残れば20億円といわれた年俸を蹴って4億円で広島に戻った黒田も、阪神から年俸10分の1の古巣に戻った新井も、数字以上の貢献をして精神的な支柱にもなりました。そんな選手たち、またそれを支えた球団やファンが一丸となって実現した今年の優勝は、「カネ」ではなく、ほとんどそれは信仰にも似た「愛と心意気」のなせる偉業だったと言っていいでしょう。



貧乏球団カープを語る上で欠かせないのが、「たる募金」です。1949年創設のカープは、原爆の悪夢から立ち上がろうとする市民にとって、元気と希望の源でした。そのカープが早くも創設の翌年深刻な経営危機に陥り、クジラ球団にコイが呑み込まれる吸収合併話が持ち上がったとき、市民の発案により広島市民球場の入口2カ所に大きな「清酒・福美人」の酒樽が置かれました。その年、当面必要とされた400万円を越える募金が集まり、球団存続の危機は回避されます。この募金は1960年頃まで続き、その後も相次ぐ災害の被災者支援のために、

また最近では新球場建設費捻出のためにと、再三にわたり「たる」は「市民の連帯とカープ愛」の受け皿となってきました。

資金力豊かな大都市の人気球団に有利な諸制度にもめげず、せっかく育てた有望選手が引き抜かれていく悲しみにも耐え、信仰にも似た「愛と心意気」に支えられて、カープはついに地方球団のしたたかな力を見せつけてリーグ優勝を成し遂げました。そして、その力を象徴するのがあの「たる

募金」なのだとわたしは思うのです。

さて、わたしが何を申し上げたいか、もうおわかりでしょう。九州教区が直面している不利な諸制度、困難な諸課題との闘いは、カープが苦闘し勝利した闘いと、ぴったりと重なり合うようにわたしには見えるのです。

おめでとうカープ!ありがとうカープ!  
「たる募金」にならい、わたしたちもあとに続いてがんばります。



各地区委員長からのメッセージ①

## 「すべての人に のべつたえよ、 神の賜える よき知らせを」

福岡地区委員長 多田玲一  
(福岡女学院教会)

表題は『讃美歌 21』405 番の歌い出しです。1941 年の『青年讃美歌』に収められて以来、永年にわたって親しまれてきた日本の讃美歌です。この讃美歌は、戦後の礼拝でも盛んに歌われたことから『讃美歌』(1954 年版)にも『讃美歌 21』にも採用されました。「よき知らせ」を「すべての人に」(1 節)、「あまねくのべよ」(2 節)、「この知らせを」「地のはてまでも 告げひろめよ」(3 節)と主の御前で互いに呼びかけ合う、日本の教会の福音宣教への熱い思いが込められた日本で生まれた讃美歌です。

ところで、私たちはこの讃美歌を礼拝で繰り返し讃美してきましたが、この福音宣教への熱意、そして任務をどのように実現するのでしょうか。

もちろん各自の活動、各教会・伝道所での活動があります。しかし、それも限界があります。福音をすべての人に、あまねく、「地のはて」にまで告げ広めるのは難しい。全世界までは(思いはあっても)無理としても、せめて日本で実現するために日本基督教団では教区を設置してその任務を遂行しようとしてきました。

日本基督教団は 1941 年の創立当初、福音宣教の任務を果たすために教派(部制)と教団と教区という体勢を取りましたが、創立から約一年半後の第 1 回教団総会で部制は廃止されました。そして敗戦後、日本基督教団では教区を強化することで福音宣教の任務を果たそうとしました。日本ではそれぞれが伝道を競い合うのではなく、地域共同体として互いに協力しながら福音宣教を進めたいとのかねてからの願い、また中央集権型の組織では再び国家の介入を招きかねないとの危惧から、日本基督教団が教区の活動を重視してきたことを私は高く評価します。

福音宣教への任務遂行として、教区は様々な取り組みを行っていますが、そのうちのひとつが教区互助です。今年 1 月、福岡地区では「みんなで支えよう教区互助」とのテーマで地区協議会を開催しました。深澤 奨教会協力委員長を招いて講演していただき、福岡地区互助推進担当者の萱野勝さんには互助献金のアピールをしていただきました。

教区互助を支えることは福音宣教への熱き思いを実現することです。これからもこの讃美歌を主の御前で高らかに讃美しつつ、福音宣教の任務を協力して果たし続けていきます。

## 「財的見通し」なしの苦労を共に

青山 実（奄美地区・名瀬教会）

NHK連続テレビ小説「とと姉ちゃん」が最終回を迎えようとしている。「普段から～」と宇多田ヒカルさんが歌う主題歌「花束を君に」が心地いい。「普段から～ロス」にならないよう、CDを購入し聴いている。ドラマでは流れていない2番の歌詞も沁みてくる。

毎日の人知れぬ苦労や淋しみもなく  
ただ楽しいことばかりだったら  
愛なんて知らずに済んだのにな

喜界教会は、島の人々から長年「丸山教会」と呼ばれ親しまれてきた。丸山邦明教師が1969年度から43年間お働き下さったからだ。

2012年度の喜界教会総会資料によれば、月定献金の月総額65,000円のうち丸山教師とご家族の献金が6万円。教区謝儀保障援助金の月額34,500円も全額を丸山教師が特別献金として教会に献げていた。教会の経常収入の9割以上が丸山教師とご家族の献金だった。丸山教師が中心的に担った「象のオリ建設反対運動」支援の外部献金額もとても大きい。

このように名実ともに丸山教師が大黒柱の「丸山教会」から、後任教師へのバトンタッチをスムーズにできるかが大きな課題だった。

九州教区「教職人事に関する申し合わせ事項」には「当該教会は、招聘の本義をよくわきまえ、将来にわたる財的見通しを以てこれに臨むべきである」と記さ

れている。丸山教師隠退直後の喜界教会には「財的見通し」とは程遠い現実があった。けれども、島の地理的な条件もあり、代務・兼務の体制で維持することも適当ではない。教区議長の梅崎先生と相談を重ね、2014年度から原淑美教師が主任教師となった。これまで奄美大島からの「通い」という変則的なかたちであったが、原教師は来年2017年度より喜界島に移住し、喜界教会の「定住牧師」となる決意を固めた。




喜界島と徳之島は各島に教団の教会が一つだけ、主任教師も「オンリーワン」となる。こうした状況には「毎日の人知れぬ苦労や淋しみ」がきつとある。そのためもあり、「普段から」奄美地区各教会に対する各地の皆様にあたたかい連帯が続けられている。深謝である。

現在、喜界教会の皆様は、祈りを合わせて精一杯献金の努力をしている。しかし「財的見通し」ができたわけではない。「2017年度は謝儀保障援助金の対象とすることができない」との教区執行部の判断を重く受け止めている。そのため奄美地区では、今年度中より教区の皆様と共に「喜界教会宣教協力献金（仮称）」を広く呼びかけることにしている。

ぜひ「普段から」のお祈りと共に、連帯献金を喜界教会にお寄せいただきたくお願い申し上げます。

# とらっしゅれんぬ

佐世保教会からの出品です。昨年まで、礼拝堂でメインスピーカーとして使用していたピーヴィーのスピーカー(MODEL-112TLS)。左右一对でドイツ製のスタンド付属です。かつて佐世保教会の担任教師をしておられたハードロック好きの某教師(現北海教区副議長)の選定なのでロックバンドにも使っていたかと思いますが。ただ残念なことに、あのかっこいい  のエンブレムは、礼拝堂には似つかわしくないということで(笑)取り外され、紛失しています。



## 互助献金2016年度中間報告

2016年度も9月末をもって半期が終わりました。互助献金の目標額1100万円の半分が満たされていてほしいところですが、例年上半期はなかなか集まらないのが実情です。しかしそれにしてもここまでの互助献金は、達成率84%に終わった昨年度と比べても低調です。期初に熊本・大分を襲った大地震による被災者・被災教会への支援に思いが集中しているということもあるでしょう。しかし互助献金はそれにもかかわらず、おろそかにしてはならない課題です。ともに宣教の働きを担う大切な仲間たちの日々の生活が懸かっているからです。

さて、2017年度の謝儀保障援助金の申請が出そろい、その計算が終了しました。11教会を対象にその総額は約2050万円となります。これに対して原資となるのは互助負担金650万円と目標1100万円の互助献金です。互助献金が目標に届いたとしても総額1750万円ですから300万円足りない計算になります。教団から新たに課せられた伝道資金負担金の分を差引く形で互助負担金を350万円削減したことがその主な原因ではありますが、このままでは今ある積立資金を食いつぶすことになりかねません。持続可能な制度の確立に向け教会協力委員会としても努力をしていますが、何よりもここ数年未達成を続けている互助献金が目標に届くよう、ぜひとも全教会・全教師からのさらなるご協力をお願いするものです。

### 2016年度教会互助献金中間報告



	2016年9月末現在	前年同月
教会互助献金	<b>2,556,030円</b>	2,778,280円
うち教師互助献金	<b>334,500円</b>	566,600円
教会互助献金参加教会数	<b>39/126</b>	わずか31%!
教師互助献金参加教師数	<b>19人</b>	年収の1%を! 年度末にまとめてだときついですよ。